

## 中国との文化交流に金字塔 世界一の大華日辞典を編集

### 新しい言葉も加えて

#### 愛大三年計画で取りかかる

愛知大学では中国から返還された華日辞典の編集に近くとりかかることになった。旧東亜同文書院大学時代に編集にあたった同学、鈴木沢郎教授が主任となり同文書院出身の内山正夫講師がカードを一まず整理し旧会議室を編集室に当て、カードは鋼鉄のタナに発音順に分類しておさめ編集方針をねっているがカードの厚さは三十頁以上に達し、十二万五千語をおさめている膨大なものだけに編集には三カ年かかる予定で、文部省に今年度補助金として百三十九万円を申請している。

同学では十五日ごろ政治、経済、文学、新聞雑誌などそれぞれ専門の教授を集めて編集委員会をつくり、さらに全国の大学に散在している同辞典関係教授を招いて大委員会をつくることになっている。

編集にあたっては新しい言葉の追加も必要なので、この方面の収集のため中国に人を派遣することも考えられている。これら新中国語を加えるとこれまでの辞典の三倍以上という世界一の大辞典となり、将来の日中文化学術交流の金字塔を打ちたてるものとして期待されている。なお出版については業者から引受けの申込みが多数あるが、いまのところいずれの印刷会社に請負わせるかきまっていない。

内山講師談 この辞典の特徴は例文が親切についていることで、これに新中国の言葉が加わるとこれまでにない完全な辞書が完成するので慎重に関係者の知識を集めて編集する方針です。

#### 中国の婦人を招く 学長の希望で教授陣強化

また同学では中国研究教授陣に中国婦人を招くことに決り、同学内に宿舍など受入れ準備を進めている。これは元上海東亜同文書院大学教授、欧陽可亮氏夫人で張祿澤さん(三二)といい、欧陽氏は旧知の本間学長の招きで戦後同学を訪れており、生きた中国語教授をやりたいとの学長の希望により夫人がこの中甸ごろ来学することになったもの。華日辞典編集の仕事がはじまった折なので、よい協力者が参加すると同学では喜んでいる。

〔注〕毎日新聞 昭和三十年五月十一日所載。

## 来月に編集専門委

軌道にのる愛大の『華日辞典』

不足分は寄付金でまかなう

愛知大学国際問題研究所内にある華日辞典刊行会は中国保衛和平委員会から寄贈された華日辞典カード十二万五千枚を整理、加筆して最高水準の華日辞典の編集に本腰を入れている。すでに六回の小委員会を開き、アルファベット順に編集し注音符号（民国七  
年国民政府教育部が公布した標準発音符号）にローマ字式発音符号を併用することなど細かい点が決った、

従来の中国語関係辞典には自然科学に関する語句は比較的少かったが、最近の中共治下の工業力の発展、日中貿易促進など内外の情勢から今度編集する辞典には工業、貿易、機械技術などの専門用語を大幅に取り入れてこの辞典の一つの特色にしたいと編集に専従する内山正夫講師は語っている。

文部省に科学研究費として三カ年分三百五十万円の申請がしてあるが、削られた額は寄付金でまかなう予定。

七月九日、十両日元東亜同文書院大学華語教授陣鈴木沢郎（愛大教授）熊野正平（一橋大学教授）野崎駿平（東北大学教授）坂本一郎（神戸外大教授）の各氏も愛大に集まり編集専門委員会を開くことになっている。

## “中国研究”知りたい 東京から米人が来豊

愛知大学小岩井教授のところへこのほど東京在住の一米人学徒から愛知大学の近代中国の研究状況をみせてもらいたいと便りがあった。便りの主はポール・キャラハン氏でハーバード大学出身で五・四運動を中心とした中国政治思想史の研究者で来る廿八日来豊する予定。

〔注〕中日新聞 昭和三十年六月二十四日所載。

## 初心者も簡単に使える 華日辞典・編集進む

### 愛大で中国人の紅一点も参加

愛知大学ではさきに中国保衛世界和平委員会から同大学に寄贈された華日辞典カードをまとめて新しい華日辞典を三カ年計画で完成しようと、学内国際問題研究所内に華日辞典刊行会を置き、熊本から招いた元東亜同文書院教授内山正夫講師を中心にカード約十二万五千枚の整理を進めていた。

その準備もほぼ終わったので、いよいよ来月九日、本間学長、小岩井法経学部長らのほかに、元東亜同文書院教授だった一橋大学熊野正平教授、東北大学野崎駿平講師、神戸外語大学坂本一郎教授や日中友好協会伊藤武雄理事長らを迎えて合同編集委員会を開く。

今までに開かれた学内刊行委員会の方針によると、辞典の性格として初心者でも簡単に使うことの出来るよう、辞典の編次(単語の順列)も従来あった中国式のポポモホ式を改め一般的なアルハベット式にかえ、音標文字を採用することになっている。

また従来の辞典では自然科学系統や工業技術関係の単語、熟語の集録が少かったが、近年中共治下に入り、工業力の発展、貿易の振興などから、工業部門における機械名や部分品名の出でくる書物が多くなったので、こうした専門用語の集録にも力を注ぐほか、一九五二年に中国文字改革委員会が決定した簡化文字(従来の文字を簡略にしたもので、我が国の当用漢字に当る)の採用など苦心が払われている。これらの点から新辞典は従来に類のない画期的な華日辞典となるわけで、学界はもとより各方面から大きな期待が寄せられている。

ただ一番の悩みは辞典編集に要する費用で、本年初め文部省に科学研究費として三カ年分約三百七十万円を申請していたが、望み薄となったので、内山講師も“寄付金集めなどの手も考えてはいますが、来年度は文部省に申請してみます”と語っている。

なお九日からの合同編集委員会には去る二十四日愛知大学中国語講師として台北から招かれた元東亜同文書院中国語教授欧陽氏夫人の張祿沢さんも紅一点として加わり、協力することになっている。

〔注〕朝日新聞 昭和三十年六月二十九日所載。

## 新語二千の抽出も終る

### 愛大の華日語辞典の編集進む

去る五月末、本格的な編集事業にとりかかった愛知大学の華日辞典の編集委員会はその後、鈴木沢郎教授を中心に仕事は順調に進んでいる。

今までに、井上中国語辞典に基づき紛失していたカード三十三音節四千五百語の補充と更に旧辞典に見られない新語約二千語の抽出を終えたのをはじめ、目下鈴木、桑島、内山の三教授の手によって整理されたカードの中国の国語辞典との照会が行われている。

またこのほかに同大学の各教授の手でそれぞれの専門分野の新語の抽出が行われ、すでに杉本出雲講師から経済政策分野の新語約百語の集録が出来上がっている。なおこのほか新学期からは同大学の中国語講師の張祿沢夫人も参加、協力することになっており、編集事業は日を追って活発化して来た。

〔注〕朝日新聞 昭和三十年八月三一日所載。

## 華日辞典・編輯進む

## 完成三年後か？

中国の好意により華日辞典のカードが送られて来て以来、その成果が期待されている。本学内には華日辞典編輯所が設置され、鈴木沢郎教授を中心に辞典編纂の大事業は開始された。より立派な辞典をわが国、中国語学界におくるべく絶ゆまぬ努力が続けられているが、その経過及び進行状態を訪ねてみることにしよう。

辞典編輯の仕事は、本年七月九日十日の両日、日中友好協会理事長伊藤武雄、元東亜同文書院大学教授熊野正平（現一ツ橋大教授）坂本一郎（現神戸外大教授）の各氏が本学に集って第一回の編輯会議が開かれた事により、実質的には始められた。これまでの数ヶ月間はこの会議に至るお膳立とも云うべき準備期間であったわけである。この会議によつて編輯の方針が打ち出され規約が作成された。その後はこの規約に基づいて進められたが、その間辞書の複雑性に由来する諸問題が後を絶たず、夏期の二ヶ月というものはカードを作つて行くと共に、問題点の集積に費された。そしてこの期間中に解決されるべき問題点は殆んど出された。このデータに基づいて九月末、編集専門委員が集まり、凡例などの執筆基準の改正が協議された。現在はこの改正原案にのつとつて進行しているし、この俣やつてゆける見通しがつき、あとは時間の問題だとのことである。しかし此事業遂行にあつてもいわずにデータのカバーする事が出来る基準は完成された感じがあるが、経済的な面で困難をきたしている。この辞書編纂の趣旨が、日中両者間の文化交流を盛んにし友好関係を深める工具としては、お互の言語、文章の習熟が絶対的に要請されるものであること、現在中国学界に立つ辞典がなく、この辞典が完成された暁には東西に誇るべきものになることは確実であること、それに辞書のカードは中国の好意により日本国民に贈られたものであり、中国側でも注目し期待しているという点からも、各方面の絶大な援助が切望されている。なおこの完成は三年後とみられる。

〔注〕愛知大学新聞 第六九号（昭和三十年十月十五日）所載。

## 華日辞典の資料に中華料理研究を提供

### 愛媛県の渡部さん

華日辞典編集の仕事を続けている豊橋市愛知大学鈴木沢郎教授のもとへ、このほど愛媛県温泉郡北吉井村、山之内中学校の渡部美登里さんから「新聞で華日辞典刊行のことを知ったが、私はこれまで中華料理について研究を続けてきた。お役に立てば幸いです」という手紙と一緒に中華料理を説明したカード九百枚を送って来た。

同大学では終戦当時国府軍に接収され、昨年九月中国保衛世界和平委員会の好意で中日友好協会あてに送られてきた旧東亜同文書院大学で集めた華日辞典原稿カード約十三万枚を基に去る四月華日辞典刊行会を作り、小岩井、鈴木、内山各編集委員らが中心となって華日辞典刊行の準備を進めているもの。

渡部さんから送られた中華料理の資料はザラ紙をカードの大きさに切って中華料理を種類別に煮方、作り方、原料、字の意味などをぎつしりと詳しく書込んだもの九百枚。

鈴木教授も「渡部さんは全然未知の人だが、中華料理に関する説明は大いに参考になる。好意は非常に有難い」と喜んでおり、十五日渡部さんあてに「これが将来辞典に取入れられたら利用者に大いに喜ばれるでしょう」というお礼の手紙を送った。

〔注〕朝日新聞 昭和三十年十二月十九日所載。

## 華日辞典に中共から新資料

## 愛大へ「中国語文」など五冊

華日辞典の編集を急ぐ愛知大学の華日辞典編集所に、このほど中国人民対外文化協会資料交換所から一通の手紙に添えて辞典編集資料五冊が贈られ、鈴木沢郎教授、内山専任講師をはじめ所員を喜ばしている。

昨年の七月、来日した中国貿易使節団が名古屋に立寄ったさい、小岩井学長や鈴木沢郎教授らが団員の「人民中国」日文版編集部の康大川氏を通じ資料の収集を依頼していたもの。こんど贈られた本は「中国語文」「北京国語語法」「同音字典」「常用漢字三千五百字表」「簡明字彙」などである。

〔注〕朝日新聞 昭和三十一年三月十四日所載。

## 『華日辞典』編集に若い力

## 春休み返上し協力 愛大生 人手不足みておれぬと

日中両国の平和促進を図る橋渡しとして華日辞典を一日も早く完成しよう、と、

愛大文学部中国語学科の学生十名は春休みに入ったさる四日から

同大内、華日辞典編さん所で勉学をかねて辞典編集事業に

協力している――。

愛知大学が新時代のわかりやすい華日辞典編集という大事業にのりだしたのは一昨年五月以来二年の歳月が流れ、こ●●●●有志をはじめ中共、●●●●●あふれる援助の手が差し伸べられたほか、昨年八月には文部省の科学研究費百三十万円の交付にも成功した。しかし専任者は編集委員長の鈴木沢郎教授、内山正夫、張祿沢両講師、杉本晃助手の四人だけのため、なかなか計画通り進まず、このほどようやく基礎資料の整理が一応まとまったところ。

学校側でも編集事業を軌道にのせるためには最低二十名の従事者が必要だと準備しているが、予算難で早急な実現はむつかしく各方面へ協力を依頼するより方法がないとみられている。この事情を知った学生たちが自発的に編集協力を申出たもので、静かな同編さん所もこのところ若さと活気にあふれている。

**鈴木編集委員長の話** 従来の辞典は七万語前後だが、これはさらに充実して十万語以上にするつもりだ。予定より大分遅れたが、近くマイクロ撮影機も入り資料収集に大きく役立つと思うので三十五年までにはなんとか完成したい。

〔注〕中部日本新聞 昭和三十二年三月●日所載。



## 研究室めぐり 愛知大学華日辞典編さん所

## 三十七年には大辞典刊行 最新、完全な編集目指す

○：愛知大学の前身、上海の東亜同文書院大学が、昭和五年以来終戦まで進めてきた華日辞典編集の計画を受け継いで、「最新にして完全」な華日大辞典の完成を目指すのがこの編さん所。

同大学では、この辞典編集事業創始者の一人、鈴木扨郎教授と、新たに迎えられた元同文書院大学予科教授、内山正夫氏、台湾から迎えた婦人講師張祿沢さんの三人が中心になり、各学部教授スタッフを協力メンバーにして、三十年三月から編さん所を開設、本格的な編集を再開した。

○：中国古典から、最新の雑誌まで利用できる完全な辞典——これが華日大辞典編集の目標だが、最初の一年間は送られて来た基本カードの整理。この作業が終つてやつと基本カードの増補工作に移った。つまり、戦後に作られた新語、新用例を、あらゆる資料から見つけ出して、新しい時代に即応する辞典の基礎を作る、根幹的な仕事だ。

○：それにはまず戦後に国内外で刊行された辞典との対照、補充をする（イ）の工作が必要だ。このためには新中国で発行された「同音字典」「学文化辞典」「新華字典」など、多くの辞典との比較、対照が行われる。同時に変動を続ける新中国に生れる無数の政治、経済用語、それに新聞用語などを記録する（ロ）の工作も並行して行われる、

「中華人民共和国憲法」「毛沢東選集」「人民日報」「学習」などがこの資料になる。こうした仕事のためには、学内各学部教授の緊密な協力が必要だが、老舎の翻訳で知られる教養部桑島信一教授や法経学部池上貞一、川崎一郎講師らの努力で、現在までに（イ）の工作が三分の一近く進み（ロ）の工作も順調に滑り出した。

○：同編さん所の計画では（イ）（ロ）の工作は三十五年に終り、三十六年に全カードを整理して、三十七年には大辞典刊行の予定だが、それに先立ち「中国現代語辞典」（仮称）出版の計画が去る四月から進められている。これは中国と関係のある実務字や、研究者の必要に応じて作られるもので、大辞典にはそのまま資料として活用出来るもの。出版の見通しがつき次第、直ちに編集に移る予定だ。

## 四年後には完成

—— 華日辭典 ——

本学教授 鈴木 択郎

## 一

中国語の研究は、中国においても、わが国においても、その他の外国においても、極めて歴史の浅いものである。従つて中国語辞典も極めて不満足なものしかなかった。辞典がないために中国語研究は進歩しない、という悪循環の中に立った。

われわれが中国語辞典を編纂しようという念願をおこしたのは、こういう中国語学界の状況にかんがみるところがあつたからである。即ち常時日華両国人ほぼ同数で合計十四、五人の中国語研究家を擁し、地理的条件にも恵まれていた同文書院こそやるべきであるということになり、当時の学長大内暢三氏(本学大内義郎教授嚴父)の要望もあり、華日大辞典の編纂に発足したのであるが、それは昭和八・九年の夏であつた。以来、終戦にいたるまで工作が続けられ終戦の際接收された原稿カードは役十四万枚に上つていた。

## 二

終戦後だいぶ月日も過ぎ、中日交通もかなり開けてきた昭和二十八年七月、終戦時の東亜同文書院大学学長であつた本学前学長本間先生の懇懇により、中共に対して前述のカードの返還を申請することにし、日中友好協会理事長内山完造氏に仲介の労を願ひ、手紙を中国科学院長郭沫若氏、及び接收の際直接接收に當つた鄭振鐸氏に送つた。

十月四日内山氏から来信あり、九月四日付の先方からの手紙では、現物のありかがわかつたから、改めて人民中国日本語版編集部に現状せよとのことであつたので早速表示のとおりにした。

二十九年五月になつてから、「保衛世界和平委員会劉貫一」の名義で、「このカードは敵産として没収したものであるから、返還はできないが、日中文化溝通のために、改めて日本人民に贈与する」旨の返事が日中友好協会へ来た。返還を熱望したものがいよいよわれわれの手にかえて来た、うれしくもあるが、また、これはたいへんなことになつたという相矛盾した複雑な感に打たれた。この原稿カードは九月二十七日帰還船興安丸で舞鶴に到着し、一応東京へ送られ、日中友好協会と従来の関係者等協議の上、原稿カードは愛大へ引渡し、完成せしめることになり、カードは十二月八日本学へ到着した。

## 三

本学では、いよいよ華日辞典編纂を決心し、この辞典には原来の関係者である元東亜同文書院予科教授内山正夫氏を三十年四月専従者として招聘し、専心これに当ってもらうことになった。

五月には華日辞典刊行会が成立し、その中に評議員会、編纂委員会が設けられた。三〇・七・九当時の評議員、編纂委員は左の通りである。

## 評議員

本間喜一(学長)、小岩井淨(法経学部長)、山崎知二(文学部長)、伊藤武雄(日中友好協会理事長)、鈴木択郎(本学教授・元書院大学教授)、熊野正平(二橋大学教授・同上)、野崎駿平(東北大学教授・同上)、坂本一郎(神戸学大教授・同上)

## 編纂委員

専門委員 鈴木択郎、熊野正平、野崎駿平、坂本一郎、桑島信一、内山正夫、尾坂徳司、池上貞一、張祿沢

協力委員 小幡清金、胡麻本萬一、松浦治七、松葉秀文、三好四郎、杉本出雲、黒木三郎、川崎一郎

## 四

本辞典編纂の仕事は、基本カードを整理し、その後に出た中日両国及び英、露両国の中国語辞典、各種専門辞典との対照補充、その他の新資料からの新語のとり入れなどであるが、社会組織と思想の一変した新中国に生れた新語もおびたしく、また死滅しつつある語も少くない、これらの蒐集と整理は、本編纂処の仕事である。革命以来、中国に於けるこの方面の研究、出版も盛んになって来たので、資料はかなり豊富である。本編纂処の最も重視しなければならないことは、資料の蒐集と人材の糾合であり、先だつものは資料費であり、人件費である。この面においては、三十一年五月文部省はわれわれの機関研究を採択され、百三十万円の助成金が下付された。三十二年四月には、当地の或る実業家がこの事業に対し、三年間継続で相当金額の資金を援助する旨申出られたので、有難くこれを受けることにした。人材の方面では今年春、元通訳官、外交官本学講師遠藤秀造氏、東北大学中国文学科卒業後、特別研究生五年の経歴を有する志村良治氏を、八月には元拓殖大学教授、NHK海外放送担当者宗内鴻氏を本編纂処専任として招聘して、陳容が一段と強化された。

更に八月には某新聞社からの要望で、中国現代用語辞典を一ヶ年間に編纂出版することとなり仕事をすすめている。この現代語辞典の内容は、将来は大辞典の一部をなすものである。尚、目下中国においては文字改革が行われており、最後の目標中国語の標音文字化に至る過程において、標音文字、簡化文字の公布実施、標準語の決定、標準語の

語音、語法、語彙の規範化、標準語の普及等多くの改革が目下進行中であり、困難な問題が残されている。それらの決定は直接華日辞典の編纂方針に影響を与えるものである。本辞典はこれらの改革が一応の落着きを見てから出版されるのが適当である。しかしその理由ばかりではなく、本辞典の規模から云っても早急の完成は困難で三十六年出版が予定されている。

〔注〕愛知大学新聞 第八九・九〇号（昭和三二年十一月十五日）所載。